

60371

教科書文庫

5

810

45-1948

01309
49679

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省著作教科書

中等國語

二

文部省

(2)



廣島市立第一中學校



中央図書館

中等
國語

文部省

(2)



広島大学図書

0130449679



目 録

一 クラーク先生……………	一
二 國際婦人會議に出席して……………	九
三 学級日記……………	十六
四 少年の日の思い出……………	二十一
五 万葉秀歌……………	二十九
六 意味の変遷……………	三十四
七 砂 一 丘……………	四十三
附録 國語学習の手引……………	六十一

一 クラーク先生

函館を午前十時に出帆した玄武丸は、七月三十一日午前二時に小樽へ入港したが、まだ小樽札幌間の
鐵路も通じていなかったこととて、黒田長官とクラーク先生の一行とは、それより陸路を肥馬に
ひちうって札幌へ募進し、学生どもはうすぎたない漁船に身を託して家もまばらな錢函に向かい、それ
より五里十一町の道をうまにゆられて人口わずかに二、三千にすぎなかった札幌へと向かつて行つた。
時は七月三十一日の火ともしごろであつたが、島將軍の企圖通りにできたというあこがれの町札幌
へ学生たちは到着した。人家店舗はまだまばらであつたが、遠來の学生どもを收容すべき校舎は、北
一條西一、二丁目より北三條西一、二丁目にいたる全ブロックを占有して整然と建ち並んでいた。い
わく二階造り木造の講堂と教室、いわく平家建て木造洋館造りの寄宿舎、これだけが廣い敷地内に
建ちはだかつていたが、東京からの学生十名が到着する以前に、考査を経て札幌学校から轉じて來
た伊藤一隆その他十三名の者どもが、先輩顔をして寄宿舎にがんばっていた。

黒田長官をはじめクラーク先生の一行が札幌に乗りこんでから、学校創立事務が本格的に進捗し、
実質は開拓学校であつた米國の州立農学校にその範をとつて校名も札幌農学校と定めることとした。
この校の主要学科はもちろん農學であつたが、開拓に必要な学科はすべて教えるようになっていた。
明治九年八月十四日諸般の準備ようやく成つて盛大な開校式が挙げられた。この日午前十時、開拓使

長官黒田清隆の式辞の後、クラーク先生の教訓にみちた大演説が開始された。嚴然たる態度で壇上に立たれた先生は、この新設農学校が將來北海道における農業の改良と生産的大産業の発展の上に寄與するところ多大なるべきを述べ、欧米においてようやくその價値を認められるにいたった農科大学を率先して北海道に建てた黒田長官の卓見を祝し、生徒に向かつては励声一番、

「青年紳士諸子よ、諸子はこの学校に入りたる以上、國家のために重要な位置と厚き信任とまたそれよりいずるところの名譽を受けるために準備努力しなければならぬ。それがためには常に健康に注意し、食欲をつゝしみ、温順と勤勉との習慣をつけ、習わんとする學術については、できうる限りこれを研究鍊磨すべきである。」と述べられた。

開校当時東京新募の者十名と札幌学校在学中試験に合格せる者とをあわせて、学生の総数は二十四名であつたが、クラーク先生が教鞭をとるに及んで、札幌学校出身者中、学力不足の者多数が退学を命ぜられ、開校後まもなく、東京英語学校の十名と札幌学校の六名を加えて第一期生の総数は十六名に減少した。

さて札幌農学校がいよいよ開校になって、その学則をいかに定めるかということが問題になつた際、札幌学校から移つて來た生徒たちが、参考のためということで札幌学校の規則書を持ち出し、第一條何々、第二條何々とその大要を英訳して、クラーク先生の前で読みあげた。聞きあつたクラーク先生は、「そのようなことで人間がつくれるものか。」と大声で怒号し、「予がこの学校に臨む規則は、

Do gentlemen!

たゞこの一言に盡きる。」と言つて、特徴のある太いまゆをびくりと動かされた。

学校は学ぶ所であるから、起床の鐘が鳴ったら、寢床をけつて起きなければいけない。食卓へつく時にはあいずをするから、直ちに集まつて來なければいけぬ。消燈時刻にはいっせいに燈火を消さなければいけぬ。ところでゼントルマンというものは、定められた規則を嚴重に守るものであるが、それは規則にしばられてやるのではなくて、自己の良心にしたがつて行動するのである。故にこの学校にはむずかしい規則は不要だと、先生は述べられた。それを聞いた学校の幹事や教授連は大いにその結果をあやぶみ、もし故意に規律を守らない者が現われたらどうなさるおつもりかと反問した。ところが先生は威儀を正し、「たゞ退学あるのみ。」と答えられた。

さて、クラーク先生の意思を傳へ聞いた生徒たちは非常に喜んだ。われ／＼はこれでもゼントルマンである。ゼントルマンは俯仰天地に恥じざる行いをしなければならぬと、みずから問うてみずから答え、町へ出てもみにくくい行爲は決してなさず、自己の行動に非常に重きをおくようになった。もし誤つて校規を犯そうものなら、進んで学監のところへ届け出で、「たゞ今かく／＼のことで五分間遅刻いたしました。」と申し立てるような氣風が全校を支配し、学生一般の風紀が非常に改まった。

クラーク先生が札幌に教鞭をとられて最初に試みられた事項は、開校の際の演説中に片鱗が現われている制欲に関する考えを実行に移すことであつた。先生は日本の学生の墮落して健康を破る者多き最大原因は飲酒と喫煙にありと断じ、学生の徳育ならびに体育上きわめて重要なのは制欲の一事であると考えられた。そこで禁酒禁煙のほかに瀆神誓言を禁ずる誓約文起草して、まずみずからこれに署名し、ほかの教授学生をもこれに加盟せしめて、校内を淨化することに全力を盡くされた。

東京英語学校から轉校して來た生徒の一番年長であつたのが佐藤昌介で、當時は二十歳前後であつたろう。伊藤一隆と私とがともに安政六年生まれの十七歳、そのほかの者も似たりよつたりの年齢であつたから、分別盛りの青年であつたように思われる第一期生も、実はわずかに少年期を過ぎたばかりの若輩ぞろいであつたといつてよいのである。

それが開校匆々、日本語を全然解さないクラーク先生が滔々と英語で講ずる植物学や英文学、ペンハロー教授の化学・農学・英語、更にホイラー教授の数学・土木工学の諸学科を聴講しつつ、英語でノートをとつたのであるが、今日の中学四、五年生の年ごろで、しかも明治初期の不完全な英語教育を受けた者どもが、どうして講義を理解し、どうしてそれを書き取つたのか、思えば不思議千万な話である。いまだかつて耳にしたことのない専門の話をノートするのであるから、生徒の苦心も一通りや二通りではなかつた。教科書が皆無に近い時代であつたから、ほとんどすべての学科が講義であつた。午前は学科を修め、午後はすきくわをとつて農場に働く生徒たちが、夜間ランプの下に集まつて熱心に営むわざは、その日のノートの整理であつた。

「あゝ、クラーク先生の植物の講義で、たび／＼バレンということばが出たろう。あれは一体どんなつゞりの字だ。」

「あれのノートにはバレンでなくてレンキマと書いてあるが、どちらがほんとかな。」その時そばでんめいに字引をくつていたひとりが、「あつたぞ、あ、あつたぞ。」と言つてこどどりした。そして「これだぞ。」と言つてさし示した字を見ると、*parachyma* — 柔組織 — と書いてあつた。

万事がこの調子であつたが、不完全なノートを生徒に提出させて、それを一々なほしてやるクラーク

先生の勞苦もなみたいていのことではなかつた。

皆寄宿制度であつたその寄宿舎では、一室をふたりに充てていたが、室内にはテーブル・いすおよびベッドが各の／＼二箇あり、冬になるとストーブが具えつけられるようになっていた。食事には多大な注意が拂われ、朝夕は洋食、晝は和食で、貨幣價值が今日とは比較にならぬほどであつた当時、食費として一箇月八四十錢を支給されていたほどであるから、その實質はなか／＼上等であつた。したがつて、学生の日々の生活は簡素ながら愉快なものであつた。

ある時、黒田長官が学校視察にやつて來て、生徒の勉強ぶりに感心し、ひとりあたり二十錢ずつの賞を與えた後、クラーク先生に向かい、

「あなたは私の希望する通りの人間、即ち國家に対して有益な働きをする人物を必ずつくり出してくれると確信する。今となつては宗教のいかんを問うべき場合でない。どうぞ思う通りにやつてくださる。』」と言つて、学生を徳化しつつあるクラーク先生の人格に敬意を表された。

学生に賞として現金を與えることは今から思うと妙な話であるが、當時は学生でも規定の労働をすれば、学校から賃金をもらえることになつていた。農場で働くと一時間五錢の労働報酬を支給される規定であつたが、最も不潔な仕事の一つであつたぶた小屋のふんそうじをやれば、更に高率の賃金がもらえるようになっていた。そこで開拓使から支給される一週間十錢の小遣錢を使い果たして、菓子代が欠乏して來ると、平素は寢坊な者でも朝早く床をけつて出かけることになつていた。朝寢で無精者であつた伊藤一隆は、その貴い作業を終つて農場から帰つて來ると、すゞま教室に飛びこまねばならぬといふようなきわどい時刻になりがちであつた。その都度伊藤はふんだらけな長ぐつをはき、手も顔も洗わ

ずに教室へ駆けこんで来るので、伊藤は臭くていかぬと同級生一同が苦情を申し立てるようになった。クラーク先生の教授法は型にはまった今日の教え方とはまるで違っていた。教科書を用うる場合であると、「おまえ、こゝまで何ページ調べて来い。」と命ぜられることが多かったが、生徒が宿題をけんめいに勉強して行っても、次の時間にはいっこう取り合わずにいる場合が多かった。といつて命ぜられた通りをしておかないと、不意に急所を突かれるので、生徒たちは恐れをなして不断の勉強を続けていた。つまり生徒は実直に勉強しさえすればよいという自由教育主義であつて、先生は常に実地に即した学問を教えて生徒を導いた。

先生はまた学生の勇氣を鼓舞するために、屋外の運動や植物採集などを奨励し、率先山野を跋涉してその範を示された。時に学生の寄宿舎を見まわることもあったが、休日の午前などに勉強している者を見つけると、午後には必ず屋外に出て新鮮な空氣を吸うようにと勧告された。

ある冬の日のことであつた。クラーク先生は生徒一同を校庭に集め、これより手稲山に雪中登山を試みる旨を宣言された。深い雪を踏んで、あえぎあえぎ山路をたどるのは生徒にとつて迷惑千万な話であつたが、かつてはマサチューセツツ聯隊を率いて勇戦したクラーク大佐が先頭を承つて猛進するので、学生どもはいきおいこめて追従せざるを得なかつた。

降り積んだ雪に覆われて、山はだを包んでいた大木がわずかにこずえのみをそこゝに突き出している。

「夏になつてはよじ登ることもできない巨木の頂に、冬なればこそ手を出すことができるのだ。それ、あのこずえに珍しいこけが生えているだろう。今がこの類を採集する好時期なのだ。だれかせいの高い者はやつて来い。こゝへ乗つてあのりつばなこけを取るのだ。」と言つて生徒をさし招き、クラーク先生は雪の上へ四つばいになつて背をさし向けた。よし來たと言つて長身の黒岩四方之進が躍り出た。そして、恩師の背を土足で踏まえ、手を伸ばしてさし示された標本をむしりとつた。黒岩の手からそのこけを受け取つたクラーク先生は、満足そうなえみを浮かべつゝそれをながめておられたが、一声高く「ペン。」と呼んで愛弟子のペンハロー教授を呼び寄せた。そしてこれは珍種だと思つたと言つて、教授の意見を求められた。後にわかつた話であるが、この時の採集品の中には学界未知の新種があつたという。

その帰途のことであつた。生徒たちはかねて用意のさん俵をしりに敷き、手稲山のスロープを雪煙をあげつゝ滑りおりたが、最も小兵であつた私は、どうしたはずみかばかりと口をあけていた大きな雪穴へどつと滑り落ち、頭上を越えてすうすうと滑つて行く学友たちがけ落す雪を浴びて、身動きができないことになつた。

山麓に達して人数を調べた一同が、「おや、大鳥がいないぞ。」と大騒ぎ。「ではあの深い穴の中だぞ。」と言つて引返し、けんめいに雪をかきわけて見たら、小さな私が元氣よくびよこんと飛び出した。実は私はその時一同が楽しみにしていた菓子包を背負わせられていたのであつたが、雪穴から助け出された私の背には、そのたいせつなものの影も形も見あたらなかつた。

明治十年四月十六日、日本政府との契約期限が満ちたクラーク先生は、再びマサチューセツツ農学校校長の職につかんがため、うしろ髪を引かるる思いで札幌を辞し、室蘭經由で帰國の途につくことに

なつた。その朝、なごりを惜しむ職員学生一同は、先生の官舎であつた創成橋畔の開拓使本陣前に勢ぞろいをして記念撮影をなし、思い／＼にうまにうち乗り、いづくまでもと恩師のあとを追つて行つた。札幌の南六里、千歳に近い島松駅に着するや、先生はうまをとめて駅通の家に休憩したが、先生を囲んで別れがたなの物語にふけてゐる教子子の顔をのぞきこんで、ひとりひとり力強い握手をかわし、「どうか一枚のはがきでもよから時おり消息を聞かせてほしい。ではいよくお別れじゃ。元氣で常に祈ることを忘れないように。」と力強い口調で別辞を述べ、ひらりとうまにまたかると同時に、

Boys, be ambitious!

と叱呼して長鞭をうちふるい、振り返り振り返り、雪泥をけ立てて疎林のかなたにその姿をかき消された。

島松駅頭クラーク先生の残されたことばは、簡單ではあるが、意は実に深いのである。青年よ、なんじらは常に大志を抱き、奮起してすべからく功名を立てよ、小成に安んぜず、力の限りを盡くして向上發達をはかり、もつて國のために盡くす有用の材たれよ、と訓えられたのであるが、近時無知な人々がこの句を誤訳して、「青年よ野心家たれ。」といつてゐるのを一再ならず耳にする。当たらざるのはなほだしきものである。

クラーク先生の嚆矢に接して熱烈な信仰的雰囲気の中に育つた第一期生の中からは、北海道帝國大學の生みの親である佐藤昌介をはじめとし、北海道水産界の元老で禁酒運動の大立者であつた伊藤一隆、支那古韻の研究に一生を費やした私のような変わり種、ならびに北海道開拓の恩人である内田澤ら^{（澤）}が輩出したと同時に、第一期生を通じて間接に先生の感化を受けた第二期生の中からは、新渡戸稻造・

内村鑑三らの英才が雲のごとくわき起つた。わずかに八箇月という短い間に、かくも偉大な感化を與へられたクラーク先生のけ高い人格と熱烈な信仰の力に対しては深き／＼敬意を表さざるを得ない。

(大島正健の文による)

二 國際婦人會議に出席して

はるかなる故國の女性に、日本の代表として招待された、國際婦人會議の報告を送る。戦後をはじめ、世界五十四箇國の婦人指導者がはせ参じたこの會議には、これまで敵國であつた日独伊にも、招待の手がさし伸べられ、まず米國女性によつて、敗戦後の日本に、國際登場の最初の機会が與えられたのである。他國のように、日本から直接代表者が來られなかつたが、自分は最善を盡くし、それを辿つて、世界の女性の温かい友情を、身をもつて知つた。

忘れもせぬ十月十二日の午後、二百名のにぎやかな女性の群れは、四台のバスに分乗して、ニューヨーク市レキシントン街の、女子青年會本部から出發した。代表者の目的地は百六十五マイルの西北に当たる、サウスリコートライトの小村である。それは大都會の雜沓を避け、委員長アリス・マクレーン夫人の大邸宅を本拠として、静かな秋の朝夕を十日間ともに生活して、世界のすみ／＼から集まつた女性たちが、心ゆくまで語り合うためであつた。

會議の主催者がわは、エレナ・ホールズウェルト夫人の總指揮のもとに、米國の十九にわたる主要婦人團體が集まり、その中には婦人クラブ連盟・大學婦人協會・婦人有権者同盟・婦人事業家専門家クラ

プ連盟・全國婦人労働組合同盟などがあつた。外國がわは全部で百三十五名、米國は五十名の代表者を送り、その顔ぶれは、今日の社会そのまゝに、あらゆる思想傾向を網羅してゐた。こゝに、この國際婦人會議の特色があつたと思う。

激励のメッセージは、トルーマン大統領、ツリグヴァリイ國際連合総務長をはじめ、その他の名士から寄せられ、一九四六年十月十二日より二十二日まで、會議は続いた。その目ざすところは、國際連合の精神をほんとうに生かすことで、女性の立場より、あすの建設へ協力するためであつた。會議の決定事項は、世界婦人の声として、國際連合に提出され、討議されることになつてゐる。

出発する時には異様に暑かつたのが、夕もやの中に銀色にけむるハドソン河畔をすべつて行くうちに、窓外をすれ／＼に飛ぶ木の枝々があわたゞしく風に揺れ出し、日暮れとともに大雨となつた。ぬれた暗夜を縫うバスの中で、私は隣席の、南米コロンビアの女子大学校長のアナレストレボ女史と知己となり、互の心を結ぶ共通性を、いち早く感じたのである。會議の一番大きな收穫は、旅行のスタートから始まつた、胸を温めるこの友情であつたと思う。それは十日間の共同生活を通じて、心の底に深く残り、さわやかな鈴のように美しく鳴つてゐる。人種やことばの違い、思想や宗教の差別はあつても、まじめさを持った人間として、よりよきあすのために生きんとする、共通な人生態度を互に感じた、心のひびきなのである。

翌朝は、すき通つた秋空の、あい色に輝くキャツキル山中に目を覚ました。遠くに重なる山々の峰は、一面のもみじにもえて、なだらかな斜面にひろがる牧場には、うしの群れが点々と散つてゐる。コートライトは人口わずか百二名の小村で、ひとりの巡査が署長も交通係も兼ねてゐる。そこへ侵

入した二百名の女たちは、近くの小町に分宿した。毎朝、海拔三千五百フィートの山の冷氣を浴びて、重なる落ち葉を踏み、朝日をな／＼めに受けて、遠くに展開する谷地を見おろしながら、山のすそを十二マイル、貸切のバスで通うのである。一日のいそがしい會議を終えて、宿に帰り着くのは、夜露にぬれた深更であつた。こうして朝から夜まで、一つに溶け合つた生活を送つた私たちは、次から次へ続くかた苦しい會議に閉じこもらず、朝の食卓でも、夕日の中に飛び散るポブラの下でも、一瞬をも失うのを惜しむかのように、ともに語り合つた。その中から、胸を打つ命の泉を、互にくみとりうとしたのである。多彩な印象は、あふれ出る水のように、私の胸に張り切りみなぎつてゐる。

會議は、政治・經濟・社会・宗教と四つの議題を提出し、第一日は政治部門から始まつた。議長のイーリッシャーカーター夫人は、太平洋關係調査所長を夫君に持ち、世界的な視野に立つた温和な女性で、十日間の議長ぶりは人間味の豊かなものであつた。開会のあいさつで、「米國人はバイオニアの精神をまず／＼生かし、欧州・アジア・南米に勃興してゐる新思想を理解し、援助すべきで、これこそ、米國多年の誇らしい夢である。」と述べた。それについて、紹介されたのは、外交政策協會の調査部長のヴェラリディーン夫人で、彼女は才色兼備、國際問題の權威者である。私たちは、四つの議題にわたつて、それ／＼の専門家を招待し、その演説をもととして、討論を進めたのである。ディーン夫人の要旨は、國際平和は、各國の歴史的相違を認めつゝ、協調の足場を築き出すことで、特にソ連との歩み寄りが強調された。激動する時代の荒波の中で、心を正しく大きく開き、平和への道を発見することは、友情の燈をもちたてるように、理解と信頼が必要なのである。

政治的な自由は、また經濟問題とは切り離して考えられないことで、第二にはその方向に移つた。

その指導者は、スミス女子大学の前経済学教授で、代議士シーリーウッドハウス夫人であった。透徹した経済知識を持つ彼女は、代議士として、民衆の利益のために立ち、打てばひびくような、理論的な米國女性の理想とも言えよう。その日の演説の要点は、富の公平な分配を説き、世界経済を支配する米國の、完全雇傭と恐慌防止が、平和へのかぎである、というのにあつた。あとの田卓會議の討論で、自由経済を原則として主張する米國でさえも、民衆の福利を護るために、民主政府の統制が必要な場合もあると認めた。もちろんこの場合、その政府は官僚や軍閥のものであつてはならない。

こゝで私は、會議の技術的な達成に触れたいと思う。どんなりっぱな演説でも、たゞ聞き流してしまえば、風のごとくに立ち去ってしまう。それを分析し吟味し、各自の経験と意見を述べて、はじめて血となり肉となるのである。代表者の個々の胸にひびいた思いを、互に吐露してこそ、豊穠な土壤のように、新しい芽を育てあげることが出来る。そこで私たちは主要演説の後に、九つの小組に分かれ、十五人ぐらいが一團となつて、数回の田卓會議を持つた。それには、討論の指導者と連絡委員が配置される。政治から経済、社会問題へと議題が移るごとに、その田卓會議の組み合わせが変わるようになってゐる。こゝで採用された方法は、民主主義を實際に生かした、アメリカの大きな貢献であつたと思う。私は二日にわたる政治部門の、田卓會議の連絡委員を受け持ち、それによつて多くを學んだ。この委員の会合で、運用の實際も知り、總体の討議の模様もくわしくわかつたのである。連絡委員長は、各委員の報告を総括して、總會に提出し、今度は全代表者の前で、質問と檢討が行われる。このようにして、代表者のすべてが、残らず發言する機会を持ち、何かを與え、何かを學びとるのである。

諸國の代表者は、主として教育家・社会事業家・著述家・弁護士・判事・政治家・婦人運動者などで、中には、國際連合で活躍する婦人もあつたが、できるだけ政府筋を避けて、民間がわから、代表者を招待したのであつた。だから、その國の政府の政策にしばりつけられることがなく、アルゼンチンなどは、ファッショとみなされてゐるペロン政府に反対して投獄されたエミリグエーロ夫人が、代表者として來てゐた。ドイツから軍用機で飛來したジースツレッカー夫人は、二兒の母親で、専門は医者である。今は連合國のために、フランクフルトのラジオ放送を行つてゐるが、そのまゆにかゝる濃いしわのかけに、悲傷痛心の長い年月が深く刻まれてゐる。まだ四十に達しない彼女は、代表者の中では年若い方だが、そのことばは、一語一語が、胸の底から血を吐くような悲痛にみちてゐる。

私は代表者のことばや、表情を通じて、その國の歴史的必然性が、こだまのようにひびいて來るのを感じた。それはだいたい四つに分けることができると思う。ナチスの暴風をくゞりぬけて來た欧州諸國の代表者は、生命力のみなぎつた火のような情熱と、現実への深い把握性を持つてゐる。一種の氣魄が、降りしきるしぶきのように私の面を打ち、内心の叫びがほとばしり出て來るようだ。それは精神的にも、肉体的にも、堪えがたい苦難を経た人が、また山を越え谷を渡つてゐる、悲しくも雄々しい姿である。そこへゆくと、米國は參戰しても、國として戦いのあらしに吹かれなかつた。それだけ欧州代表者のように、切迫した、容赦のない、はげしい息遣いはない。おうようで、明かると親切で、正義感も、悲劇のはげしさにゆられたことのないおだやかさを持つてゐる。ゆったりした性格の大きな、責任と自由をはっきりわきまえた健全さがある。次に南米の諸國と西アジアの小國を見渡すと、その代表者たちは、強國の影にあされて、生き／＼伸び切れない自國の悩みがある。戦争の熱湯はくゞ

らなかつたが、自由なあすを求めめる精神は、強くこれらの胸の底を流れ、架空な美しいことばには動かされない現実を見ぬく鋭い目を持っている。その点は、東洋も同じであるが、印度や中國の代表者は混沌とした苦悶の深淵の中で、地の底にまでひびくような呻吟にあるような感じがした。しかし、それは絶望の苦悶ではなくて、生まれいずる悩みの声である。朝鮮の朴仁徳夫人は、京城から飛來したが、悪天候のため、會議の最終日に到着した。こうして會議に参じた代表者は、さまざまの違つた背景の中から、あすの平和を求めめる一つの声に合したのである。

夕やみのせまる食堂のポーチで、馮玉祥夫人は、血涙をしぼるような憂いの心をたゞえて、中國の危難を私に語っていた。高原の夕日はあか／＼と照りはえて、黄金の光を峰の頂に投げていたが、今は、紫色の夕もやがあたりを包み、夕食前のこのひと時に、人々の群れはどこへやら姿を消していた。こうした静寂のひと時に、語り合うことばは、會議の面には表現されない相手の心の深さにとゞくものである。馮玉祥夫人は、日本軍の戦火に追われて、北京から香港・重慶へと落ちのび、幾万の戦時孤兒の救済に当たっていた。日本軍のもたらした、苦しみのるつぼの中にあつた人なのだ。ふたりが話しているその時、前庭の枯れ葉を踏んで近づいて來たのは、ドイツのスツレッカー夫人だつた。灰色のうすやみの中に、私たちふたりの白く浮かぶ顔をはっきり認めた時、彼女は思わず、「ああ、中國と日本ね。」と驚きを含んだ声で、いすを引き寄せた。それは、日本軍の手で苦しんだ中國の女性が、理屈はどうであろうとも、こうして率直な感情で私と対座していることの驚きであつたと思ふ。馮夫人は冷え／＼した手を私の上に重ね、「We are good friends」と言つた。そのことばには、みじんの虚偽もない。かくも率直に言えるのは、過去のことは水に流してしまふという、東洋的な、

無自覚な寛大さではなくて、彼女が私を通して、今は同じ苦しみを分かちつゝ、解放の途上にある日本の女性に、愛情を感じているからなのである。私はそこに大きな責任を感じた。この感じを更に深く強めたのは、フィリピンの代表者の姿である。そのひとりのエムリエヴァンガリスタ女史はフィリピンのゲリラ戦で日本軍に捕らえられ、二十箇月の拷問にさいなまれて、まだ健康を回復していない。彼女は暴虐の日本軍閥をせめはするけれど、その同じ犠牲者である日本人民を、少しもせめてはいない。彼女がそれだけの理解を持っているだけに、彼女の前に立つた時、私は慚愧の念にたえなかつた。私も日本人のひとりとして、その責任を全然のがれることはできない。私はかたく心に誓つた。日本人民の責任は、再び、この暴虐の歴史をくり返さないことである。あゝ私たちは、勇氣と忍耐とをもつて、りっぱな自由な祖國の再建に当たらねばならぬ。そのみが、彼女と同じく、限らない苦しみを負うた無数の犠牲者への、唯一の手向けである。

キャッツキル山中の會議は、総指揮のルーズヴェルト夫人の演説で終りを告げ、めい／＼の心にあらたな情熱と愛情を與えた。國際婦人會議は永続的なものではないが、英國代表のリーディング卿夫人の奔走で、情報奉仕部が生まれ、ロンドンに本部を置くことになつた。また東洋代表者の間では、一九四七年の秋を期して、マニラに東亞婦人會議を開き、相互の理解をはかることになつた。日本の女性の國際的活躍は、平和と民主の國家へのスタートとして、重要性を持っている。

ニューヨークに着いた一同は、十月二十四日、ウオドロフリアストリアホテルで、米國の参加團體の幾百万にのぼる會員にサウスリコトライトの會議を報告するため、公開の大会を持つた。その日、二十七名の演説者のひとりとして私も選ばれた。千五百の女性の前に立つた時、私の胸にもえる

せつなる思いは、世界平和の一員としての、民主日本を築いている、日本人民のほんとうの姿を伝えることであつた。これまで軍部のもとにあつて、日本人の誇るべき美しい本心は全くおぼわれ、歪曲されていたのである。今こそ、眞実の、健全な心を知ってもらえる時が来た。だが、それは容易ではない。演壇に立ったその瞬間、もし私がかつての敵國民としてつめたひとみを受けたとしても、それはやむをえないことなのだ。しかしその予期に反して、なんと熱烈な声援を、私は受けたことであらう。この日、日本のひとりの女に送られた眞実の激励は、故國の女性が灰燼の中から、目覚め、成長し、より豊かな、正しいあすへ歩み行こうとしているからである。

(石垣綾子の文による)

三 学級日記

学級日記というものは、やゝもすればだん／＼と形式におちいり、味もなくなり、その必要さを感じなくなりがちのものである。これは、学級日記ばかりではなく、学校日記も、また個人の日記もそうである。すべて日記は、記すべきものがある時に、簡明に記しておくことがいいのであって、形のためにむりに整えられるべき性質のものではない。

本課は、開校記念日が近づいて来るので、その準備を中心にして書かれた学級日記である。各班の思い思いの出し物の練習が、いかにも少年少女らしい愛校の情熱と結ばれて、明かるく高まって行く様子が書かれてゐる。

どこの学校でも、四季おり／＼の催し物もあろうし、行事もあろう。これをうっかり見過ごさないで、学級の者が、みんな心一つにして、このような日記を書いて行くのも愉快ではないか。

月 日

混声合唱の練習がだん／＼できあがつて来る。強弱もできて来た。みんなの声が、とけあいながら曲が進んで行くのは、楽しいものである。混声でなければ、こんな美しい合唱も味わえないと思つた。

高橋君の熱心な指揮によつて、もっともつとじょうずになるだろう。やがて来る開校記念日の音楽会までには、りっぱなものにしあげよう。

月 日

読書発表会があつた。伊藤君は、「島崎藤村の童話」について読後の感想を述べた。「この童話の形と内容とは、よく調和しており、深いものが示されている。けれども小さな子供たちに果たしてそのことが理會されるかどうか、また興味があるかどうか、よくわからない。」という意見だつた。

三田村さんは、「北原白秋の童詩」について発表した。「ことばが豊かであり、その使い方もじょうずで、美しい感情が巧みにとらえられている。白秋の童詩は、やはり独得の韻律にその本領があるように思う。「お祭」とか、「かにとこやさん」などのように、一種のかけ声や、はやしのあるものが生き／＼していると思う。」と述べた。

そのほか、太田君の「ファールブルの昆虫記」、大野さんの「ミレーの傳記」、山本さんの「このごろ

の少女雑誌について」などの発表があった。

終りに石村君が、「日本を愛した人々」という話をした。小泉八雲・モライス・ブルノー・タウトの三人のことであった。なか／＼よかった。

月 日

國境に立つ山々のもみじがきれいな色になった。よく晴れた青い空を背景として、いっそう美しく見える。渡り鳥が飛んで来る。このごろは、だれも、病気で休む者がない。健康な教室は、明かるい教室。

月 日

班別野球対抗試合が計画されている。われ／＼の学級から出場している投手太田君は、おそろく全校随一の快腕を持っているであろう。

しかし、隣の二組の後藤君の強打ぶりも、またすごい。

試合は、どうなるか全く予想がつかない。女子部では、庭球戦をやることになっている。運動季節も、もうおしまいになるので、みんな猛練習を続けている。

月 日

美術クラブの佐野君と廣瀬さんは、図画展覧会の準備でいそがしそうである。もうだいたいぶん作品が集まった。油絵も水彩画も、デッサンも、木版画・クレパス画も集まった。図案や、工芸品も集まった。鳥居君の石膏彫刻は、なか／＼の傑作である。早く開校記念日の美術展覧会が来ればいいと思う。大西先生が秘蔵の名画複写を特別出品なさるそう。

月 日

オリオンクラブ（人形しばいの人たち）では、もうそろ／＼人形ができあがるらしい。工作室で、そくまで、人形作りを続けている。クラブ員のほかには、決して見せない。記念日に一度に公開して、みんなをあとと言わせるのだそうだ。出し物も、みなオリオンクラブの創作である。

大島さんが、盛んにピアノをけいこしはじめた。人形しばいの伴奏だ。

月 日

札幌に轉校して行った吉野君から、学級にあてて手紙が来た。もう手稲山には、雪がやって来たこと、空の色が実に美しいこと、かぼちゃのおいしいこと、時計台の鐘のひびきのすばらしいこと、クラーク先生のこと、——おしまいに、この冬からスキーを始めようと思っていることなどが、こまかに書いてあった。さし絵入りだからなおもしろい。教室の掲示板にはつておく。吉野君は、スポーツマンだから、きつとスキーでその腕を発揮することだろう。学級として、返事をまとめて送ることにきめた。

月 日

きょう、担任の先生がお休みになった。先生のおにいさんが急に病氣になられたので、昨夜、汽車でたれたということである。先生のおにいさんの御全快をお祈りする。

いつものように、時間割をきめて、学習をした。どの時間も、みんな一心にやった。おしまいの時間に「幸福」という題で、話し合いをした。小学校の國語教科書で学習した「幸福」の文章についても話が出た。「幸福の園」についても話がとりかわされた。藤村・トルストイ・メーテルリンクの「幸

「福論」を考えたり、比較したりして、話は盡きなかった。「幸福」とは一体何かという問題は、まだまだい盡くせない気がする。先生がおいでになったら、もっとこの話し合いは、楽しかったろうし、また深められたことと思う。

月 日

学級雑誌ができあがった。雑誌部の人たちの労苦に感謝する。今度はなかく部厚くてりっぱだ。装幀も、厚紙に布を張った、じょうぶなものだ。これなら、回覧しても、すぐこわれることはあるまい。巻頭には、先生のお得意の警句が三題掲げられてあった。早く読みたい。例によって出席簿の順で回覧することにした。

月 日

先生から組あてに電報がとどいた。おにいさんの御病氣が、よくなって来たので、あす帰られるとそうことである。よかった。

きょうは、図書室で、すきな読書をした。図書室は、まだ完備されていないが、みんなで、少しずつ育てているので、だん／＼充実して来た。圖書の分類や陳列のしかたにもっとくふうがいる。

月 日

先生がお見えになった。たった六日間であるが、先生のお顔が珍しい気がした。きょうは定例の体重測定日、めい／＼のグラフに記入する。

月 日

いよく、あすは開校記念日。クラブの作品や、出し物や、発表でにぎわうことだろう。一般に

公開するのだから、みんな腕によりをかけるに違いない。

学校の内外をきれいにそうじしたり、装飾したりして夕方になる。あすはお天気であるように。

四 少年の日の思い出

客は夕方の散歩から帰って、私の書齋で私のそばに腰掛けていた。晝間の明かるさは消え失せようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘陵の多い岸に鋭く縁どられて、遠くかなたまで広がっていた。ちょうど私の末の男の子がお休みを言ったところだったので、私たちは子供や幼き日の追憶について話し合った。

「子供ができてから、自分の幼年時代のいろ／＼の習慣や楽しみごとがまたよみがえって来たよ。それどころか、一年前からぼくはまたちようちよう集めをやっているよ。お目にかけようか。」と、私は言った。

かれが見せてほしいと言ったので、私は蒐集のはいつている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱をあけて見てはじめて、もうすっかり暗くなってきているのに気づき、私はランプを取ってマッチをすった。するとたちまち外の景色はやみに沈んでしまい、窓いっぱい不透明な青い夜色にとどまされてしまった。

私のちようちようは明かるいランプの光を受けて、箱の中から燦然と光り輝いた。私たちはその上からだをかどめて、美しい形や濃いみごとな色をながめ、ちようちようの名まえを言った。

「これは黄べにしたば蛾で、ラテン名はツルミネア。こゝらではごく珍しいやつだ。」と、私は言った。

友人は一つのちょうをビンをついたまゝ箱の中から用心深く取り出し、羽の裏がわを見た。

「妙なものだ。ちょうちょうを見るくらい、幼年時代の追憶を強くそゝられるものはない。ぼくは小さい少年のころ、熱情的な蒐集家だったものだ。」と、かれは言った。

そしてちょうちょうを再びもとの場所に刺し、箱のふたを閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その追憶が不愉快でもあるかのように、かれは無愛想に口早にそう言った。その直後、私が箱をしまつてもどつて来ると、かれは微笑して、またたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それからかれは言った。「きみの蒐集をよく見なかったけれど。

ぼくも子供の時、むろん蒐集していたのだが、残念ながら自分でその追憶をけがしてしまつた。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

かれはランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、私たちの顔は快いうす暗がりの中に沈んだ。かれが開いた窓の縁に腰掛けると、かれの姿は外のやみからほとんど見分けがつかなくなつた。私は葉巻を吸つた。外では、かえるが遠くからかん高くやみ一面に鳴っていた。友人はその間に次のように語つた。

ぼくは八つか九つの時、ちょうちょう集めを始めた。はじめは特別熱心でもなく、たゞはやりだつたので、やつていたまでだつた。ところが、十歳ぐらゐになつた二度めの夏には、ぼくは全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心をうちこんでしまい、そのため他のことはすっかりさぼりかしてしまつたので、みなは何度もぼくにそれをやめさせなければなるまいと考へたほどだつた。ちょうを捕りに出かけると、学校の時間だろうが、お晝御飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか耳にはいらなかつた。休暇になると、バンを一きれ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたび／＼あつた。

今でも美しいちょうちょうを見ると、おり／＼あの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、ぼくはしばしの間、子供だけが感ずることのできる、あのなんともいへぬ、むさぼるような恍惚感に襲われる。少年のころ、はじめて黄あげはちょうに忍び寄つた、あの時味わつた氣持だ。また、そういう場合、ぼくは忽然として幼き日の無数のせつなを思い浮かべるのだ。強くにぶら乾いた荒野のやさつくような晝さがり、庭の中の涼しい朝、神祕的な森のはずれの夕方、ぼくはまるで宝をさがす人のように綱を持って待ち伏せていたものだ。そして美しいちょうを見つけると、特別に珍しいのでなくつたつてかまわない、ひなたの花にとまつて、色のついた羽を呼吸とともにあげさげしているのを見つけると、捕らえる喜びに息もつまりそうになり、次第に忍び寄つて、輝いている色の斑点の一つ一つ、すきとちつた羽の脈の一つ／＼、触角の細いかさ色の毛の一つ／＼が見えて来ると、その緊張と歡喜ときたらなかつた。そうした微妙な喜びと激しい欲望との交錯は、その後そうたび／＼感じたことはなかつた。

ぼくの両親はりっぱな道具なんかくれなかつたから、ぼくは自分の蒐集を古いつぶれたボール紙の箱にしまつておかねばならなかつた。びんのせんから切り抜いた田いキルクを底にはりつけ、ビンを

それにとめた。こうした箱のつぶれた壁の間にぼくは自分の宝物をしまっていた。はじめのうちぼくは自分の蒐集をなかまに喜んでたび／＼見せたが、他の者は、ガラスのふたのある木箱や緑色のガゼを張った飼育箱やその他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大でセンセーショナルな発見物や獲物があっても、内証にし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。ある時ぼくは、ぼくらの所では珍しい青いこむらさきを捕らえた。それを展翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子供にだけは見せようという氣になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生のむすこだった。この少年は、非の打ちどころがないという悪徳を持っていた。それは子供としては二倍もきみ悪い性質だった。かれの蒐集は小さく貧弱だったが、小さいいなのと、手入れの精確な点で、一つの寶石のようなものになっていた。かれはその上、いたんだりこわれたりしたちやうの羽をにかわではぎ合わすという非常にむずかしい珍しい技術を心得ていた。とにかくあらゆる点で模範少年だった。そのためぼくはねたみ嘆賞しながらかれを憎んでいた。

この少年にこむらさきちやうを見せた。かれは専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、十銭ぐらいの現金のねうちはあると踏んだ。しかしそれからかれはなんくせをつけはじめ、展翅のしかたが悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、その上、脚が二本欠けているというもつともな欠陥を発見した。ぼくはその欠点をたいしたものとは考えなかったが、酷評家のために自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それでぼくは二度とかれに獲物を見せなかった。

二年たつて、ぼくたちはもう大きな少年になっていたが、ぼくの熱情はまだ絶頂にあった。そのころ、あのエミールが楓蚕蛾をさなぎからかえしたといううわさが廣まった。今日、ぼくの知人のひとりが百万円を受けついでとか、リヴィウスのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、その時ほどぼくは興奮しないだろう。ぼくたちのなかまで、楓蚕蛾を捕らえた者はまだなかった。ぼくも自分の持っていた古いちやうの本のさし絵で見たことがあるだけだった。名まえを知っていないがら自分の箱にまだないちやうの中で、楓蚕蛾ほどぼくが熱烈にほしがっていたものはなかった。幾度となくぼくは本の中のあのさし絵をながめた。ひとりの友だちはぼくにこう物語った。「かっ色のちやうが木の幹や岩にとまっているところを、鳥や他の敵が攻撃しようとする、ちやうはたんとでいる黒みがかかった前翅をひろげ、美しい後翅を見せるだけだが、その大きな光る斑点は非常に不思議な思いがけの外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまふ。」と。

エミールがこの不思議なちやうを持っていくことを聞くと、ぼくはすっかり興奮してしまつて、それが見られる時の來るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐぼくは中庭を越えて、隣の家の四階に昇って行った。そこに例の先生のむすこは小さいながら自分だけのへやを持っていた。それがぼくにはどのくらいうらやましかつたかわからない。途中でぼくはだれにも会わなかった。上にたどりついて、へやの戸をノックしたが、返事がなかった。エミールはいなかったのだ。ドアのハンドルをまわしてみると、入口はあいていることがわかった。

せめて例のちやうを見たいと、ぼくは中にはいった。そしてすぐに、エミールが蒐集をしまつている二つの大きな箱を手を取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのちやうはまた展

翹板に載っているのかもしれないと思いついた。果たしてそこにあった。かっ色のびろうどの羽を細長い紙片に張りのばされて、楓蚕蛾は展翅板にとめられていた。ぼくはその上にかぐんで、毛の生えた赤かっ色の触角や、優雅ではてしなく微妙な色をした羽の縁や、下翅の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを残らず、まぢかからながめた。あいにくあの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙片の下になっていたのだ。

胸をどき／＼させながらぼくは誘惑に負けて、紙片をとりのけ、留針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、さし絵のよりはずっと美しくずっとすばらしく、ぼくを見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望を感じて、ぼくは生まれてはじめて盗みを犯した。ぼくは針をそっとひっぱった。ちょうはもう乾いていたので、形はくずれなかった。ぼくはそれをてのひらに載せて、エミールのへやから持ち出した。その時さしめぼくは、大きな満足感以外何も感じていなかった。

ちょうを右手に隠して、ぼくは階段をおりた。その時だ。下の方からだれかぼくの方にあがって來るのが聞えた。そのせつなにぼくの良心は目覚めた。ぼくは突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということ悟った。同時に、見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、ぼくは本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っこんだ。ゆっくりとぼくは歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたというつめたい氣持にふるえていた。あがって來た女中とびく／＼しながら、れ違つてから、ぼくは胸をどき／＼させ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入口に立ちどまった。

即座にぼくは、このちょうを持ってはいられない、持って帰って、できるなら何事もなかったようにしておかねばならないと悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないかということを極度に恐れながらも、急いで引返し、階段を駆け上がり、一分の後には再びエミールのへやの中に立っていた。ぼくはポケットから手を出し、ちょうを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、ぼくはもうどんな不幸が起つたかということを知った。そして泣かんばかりだった。楓蚕蛾はつぶれてしまったのだ。前翅が一枚と触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばら／＼になっていて、つくろふことなんかもう思いもよらなかった。

盗みをしたという氣持より、自分がつぶしてしまった美しい珍しいちょうを見ている方がぼくの心を苦しめた。微妙な色がかつた羽の粉が自分の指にくっついてるのをぼくは見た。またばらばらになった羽がそこにころがっているのを見た。それをすっかりもと通りにすることができたら、ぼくはどんな持ち物でも楽しみでも喜んで放棄しただろう。

悲しい氣持でぼくはうちに帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰掛けていたが、ついにいっさいを母にうちあける勇氣を起した。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白がどんな罰を忍ぶことより、ぼくにとってつらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえはエミールのところに行かねばなりません。」と、母はきっぱりと言った。「そして自分でもう言わなくてはなりません。それよりほかにどうしようもありません。おまえの持っているものうちから、どれかをうめ合わせに選りぬいてもらうように申し出るのです。そして許してもらおうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて他の友だちだったら、容易にそうする氣になれただろう。かれがぼくの言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、ぼくは前もってはつきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、ぼくは出かける氣になれなかった。母はぼくが中庭にいるのを見つけて、「きょうのうちでなければなりません。さあ、行きなさい。」と小声で言った。それでぼくは出かけて行き、エミールはと、たずねた。かれは出て来て、すぐに、だれかが楓蚕蛾をだいなしにしてしまった、悪いやつがやったのか、あるいは、ねこがやったのかわからない、と語った。ぼくはそのちょうを見せってくれと頼んだ。ふたりは上にあがって行った。かれはろうそくをつけた。ぼくはだいなしになつたちやうが展翹板の上に載っているのを見た。エミールがそれをつくろうために努力した跡が認められた。こわれた羽はたんねんにひろげられ、ぬれた吸取紙の上に置かれてあつた。しかしそれはなすよしもなかった。触角もやはりなくなつていた。

そこで、それはぼくがやったのだと言ひ、くわしく話し説明しようと思ひた。すると、エミールは激したり、ぼくをどなりつけたりなどはしないで、低くちえつと舌を鳴らし、しばしじつとぼくを見つめていたが、そのあげく、「そうか、そうか、つまりきみはそんなやつなんだな。」と言つた。

ぼくはかれにぼくのおもちやをみんなやると言つた。それでもかれは冷淡に構え、依然ぼくをたゞ輕蔑的に見つめていたので、ぼくは自分のちやうの蒐集を全部やると言つた。しかしかれは、「けつこうだよ。ぼくはきみの集めたやつはもう知つてゐる。その上きょうはまた、きみがちやうちやうをどんなに取り扱つてゐるかということを見るこゝろができたさ。」と言つた。

その瞬間ぼくはすんでのところ、あいつのどつぷしに飛びかゝるところだつた。もうどうにもしようがなかつた。ぼくは悪漢だということにきまつてしまい、エミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに侮蔑的にぼくの前に立つていた。かれはのしりさえしなかつた。たゞぼくをながめて、輕蔑してゐた。

その時はじめてぼくは、一度起つたことはもうつぐないの出来ないものだということを知つた。ぼくは立ち去つた。母が根掘り葉掘り聞こうとしないで、ぼくに接吻だけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思つた。ぼくは床にはいれと言われた。ぼくにとつてはもう遅い時刻だつた。だが、その前にぼくはそつと食堂に行つて、大きな色の厚紙の箱を取つて來、それを寢台の上に載せ、やみの中で開いた。そしてちやうちやうを一つ／＼取り出し、指でこなく／＼におしつぶしてしまつた。

(ヘルマン・ヘッセ原作——高橋健二の訳による)

五 万葉秀歌

春過ぎて夏來たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山(卷二、二八)

天武紀 持統天皇

持統天皇の御製で、藤原宮址は、現在高市郡鴨公村大字高殿、高殿小学校隣接の傳説地、土壇を中心とする敷地であるか。藤原宮は、持統天皇の四年に高市皇子御視察、十二月天皇御視察、六年五月から造営を始め、八年十二月に完成したから、おそらくは、八年以後の御製で、宮殿からながめた

もうた光景ではなからうかと、拜察せられる。

一首の意は、春が過ぎて、もう夏が来たとみえる。天の香具山のあたりには、きょうはいっぱい白い衣をほしている、というのである。

「らし」というのは、推量だが、實際を目前にしつゝいう推量である。この歌は、全体の声調は端嚴ともいうべきもので、第二句で「來たるらし」と切り、第四句で「衣ほしたり」と切って、「らし」と「たり」で、い列の音をくり返し、一種の節奏を得ているが、人麻呂の歌調のように鋭くゆらぐというのではなく、やはり、女性にまします御語氣と感得することができるのである。そうして、結句で「天の香具山」と名詞どめにしたのも、一首を整正端嚴にした。天皇の御代には、人麻呂・黒人をはじめ、すぐれた歌人を出したが、天皇にこの御製があるを拜誦すれば、決して偶然でないことがわかる。

天智一〇〇〇 天智三十三 二年 香具山

この歌は、新古今集や、小倉百人一首には、「春過ぎて夏來にけらし白たへの衣ほすてふあまの香具山」として載っているが、これだけのわずかな相違で、歌全体に大きな差異のあることを知らねばならぬ。現在、高殿村の土壇に立つて香具山の方を見渡すと、この御製のいかに実地的、即ち写生的であるかということがわかる。眞淵の「万葉考」に、「夏のはじめつころ、天皇埴安の堤の上などにみゆきし給ふ時、かの家らに衣を懸けほしてあるを見まして、げに夏の來たるらし、衣をほしたりと、見ますまに／＼のたまへる御歌なり。夏は物うちしめれば、よろづの物ほすは常のことなり。さてはあまりにことかろしと思ふ後世心より附けそへごと多かれど、みなわろし。いにしへの歌は言には風流なるも多かれど、心はたゞうち見うち思ふがまゝにこそよめれ。」といつてあるのは、名言である。

天さがる夷の長路ゆ恋ひ來れば明石の門より倭島見ゆ (卷三、二五五)

柿本人麻呂

これは西から東へ向かつて帰つて來る時の趣で、一首の意は、遠い西の方から長い海路を來、家郷恋しく思い続けて來たのであったが、明石の海門まで來ると、もう向こうに大和が見える、というので、羈旅の歌としてもずいぶん自然に歌われている。それよりも注意すべきは、一首が人麻呂一流の声調で、強く大きく豊かだということである。それでいて、むくみのようにぶく／＼して、適動ともいうべきひびきだということである。こういう歌調も万葉歌人全般というわけにはゆかず、家持のごときも、こういう歌調を学んでなお、こゝまで到達せしめたところを見れば、なんのかのと安易に片づけてしまわれない複雑な問題が包蔵されていると考へるべきである。

若の浦に潮満ち來れば濁を無みあしべをさしてたづ鳴き渡る (卷六、九一九)

山部赤人

赤人の歌である。「若の浦」は今は和歌の浦と書くが、弱浜とも書いた。また、聖武天皇のこの行幸の時、明光の浦と命名せられた記事がある。「濁」は干濁の意である。

一首の意は、若の浦にだん／＼潮が満ちて來て、干濁がなくなるから、干濁に集まっていたたくさんのつるが、あしの生えている陸の方に飛んで行く、というのである。

やはりこの歌も、清潔な感じのする赤人一流のもので、「あしべをさしてたづ鳴き渡る」は、写象鮮明でうまいものである。また声調も流動的で、作者が氣のりしていることも想像するにたたくはな。 「濁を無み」は、赤人の要求であったらうが、かすかな「ことわり」がひそんでいて、もっと古

いとこの歌なら、こうはいわない。例えば、高市黒人作、「櫻田へたづ鳴き渡る年魚市潟潮干にけらししたづ鳴き渡る」のごときである。つまり、「潟を無み」の第三句が弱いのである。これは、もはや時代的の差異であろう。この歌は、古來有名で、敘景歌の極致ともいわれている。

なほりまゝの御歌

三十二

五ノ南ノ...

わが背子はいづく行くらむ奥つ藻の名張の山をけふか越ゆらむ (卷一、四三) 當麻真人麻呂の妻

當麻真人麻呂の妻が、夫の旅に出た後詠んだものである。あるいは、伊勢行幸にでもお伴をして行った夫をしのんだものかもしれない。名張山は伊賀名張郡の山で、伊勢へ越える道筋である。

「奥つ藻の」は、名張へかかる枕詞で、奥つ藻は底深く隠れている藻だから、「かくる」と同義の語「なばる」(なまざる) にかけてのものである。

一首の意は、夫は、今どこを歩いておられるだろうか。きょうは、多分名張の山あたりを越えていらっしゃるだろうか、というので、一首の中に「らむ」が二つ、第二句と結句とに置かれて、調子をとっている。この歌が、古來秀歌として鑑賞せられたのは、万葉集の歌としては、わかりよく、口調もよいかからであったが、そこに特色もあり、消極的方面もまたそこにある、といっているであろうか。しかしそれでも、古今集以下の歌などと違って、厚みのあるところ、名張山という現実をもつて来たところなどに注意すべきである。

憶良らは今は罷らむ子哭くらむそのかの母もわを待つらむぞ (卷三、三三七) 山上憶良

「山上臣憶良宴を罷る歌一首」という題がある。憶良は、大宝元年遣唐使に従い、少録として渡海、

慶雲元年帰朝、靈龜二年伯耆守、神龜三年筑前守、天平五年の「病に沈みてみづから哀しむ文」には、年七十四と書いてある。この歌は、多分筑前守時代の作で、そうして、この前後に、大伴旅人、沙彌満誓・防人司佑大伴四綱の歌等があるから、太宰府における宴会の時の歌であろう。

一首の意は、この憶良はもう退出しよう。家には子供も泣いていようし、そのかれらの母(即ち憶良の妻)も待っていないよぞ、というのである。

憶良は、万葉歌人中の大家であるが、飛鳥時代・藤原時代あたりの歌人の詠歌に親しんで来た目には、急に、変わったものに接するよう感ぜられる。即ち、一首の声調がいかにもごつ／＼していて、「ものゝふのやそうぢがはの綱代木に」というようなのび／＼した調子にはゆかない。一首の中に、三つも「らむ」を使っておりながら、訥々としていて、流動のひびきに乏しい。「わが背子はいづくゆくらむ奥つ藻の名張の山をけふか越ゆらむ」という「らむ」の使いざまとも違ふし、結句に、「わを待つらむぞ」といっても、人麻呂の「妹見つらむか」とも違ふのである。そういうふうでありながら、どこかに実質的なところがあり、軽薄平俗になつてしまわないのがその特色である。また、そういうなめらかな歌調が、当時の人にも、かえって新しくひびいたのかもしれない。

諧謔微笑のうちに現われる実生活的直接性のあるこの歌だけを見ても、その特色がよくわかるのである。この一首は、憶良の短歌ではやはり傑作というべきであろう。憶良は、歌を好み勉強もしたことは「類聚歌林」を編んだのを見てもわかる。しかし、だいたいとして、日本語の古來の声調に熟しえなかつたのは、漢学素養のために乱されたのかもしれない。卷一の「いざ子どもはやく大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」という歌は、有名だけれども、調べがどこか弱くて物足りない。これ

はむしろ、黒人の「いざ子ども大和へ早く白すげの眞野のはり原手折りて行かむ」の方が、まさってゐるのではなからうか。そういうくあいであるが、憶良にはまた、憶良的な独得のよさがある。

(斎藤茂吉の文による)

六 意味の変遷

語は社会人の間に使われるものでありますから、同一の、しかも廣い意味の語は、それ／＼これを使う社会により、これを使う所によって、その社会での意味、そのおりの意味に変わります。一定の学校の中で、生徒どうしが、「校長先生」と言えば、その学校の校長であつて、ほかの、または一般の校長先生ではありません。ある兄弟が語り合つて、「おじさん」と言えば、その際は、話の中にはいるべき一定の「おじさん」と、まちがひなく理解せられます。働きの語にしても、くじ引きを始める時に、「さあお引きください。」と言えば、そのくじを引くことに疑いなく、「ねずみが物を引く」意味の引くとは違つています。かように一般の義の語が、臨時にそれ／＼適當な意味に変えられる通りに、社会が違えば、そのようなことが起つて來ます。「あぶら」は、床屋の店では、頭髮につけるあぶらであり、天ぷら屋の店では、揚げ物用のあぶらであり、機械を運轉している所では、機械油でありましよう。「かす」は酒を造る所では、「酒のかす」でしょう。「うま」が將棋の時と、こびきなどが仕事場という時と、意味が違い、「うし」が建築の方では一種のはりの名になっているなど、みな一般の意味が特殊になるのであります。もっとも學術上の書物などでは、一定の意味をもつて一定の語を使います。

が、日常の生活においてはそれ／＼の社会にしたがつて、一つの語を、一方一般の意味に使いながら、またその語を、時に應じて、特殊の意味に使つたり、または一般の意味の語を全く特殊の意味にしてしまいます。あの「いも」という語はさつまいも・さといも・やまのいもなど、いも類の通称ですが、所によつては通常さつまいものことになっており、また所によつてはやまのいもをいうようになります。これらは特殊な用法に移る有様が見える一例であります。全く特殊の意味になった場合を見るのに、あの「鬼」というのが、兒童の遊戯——おにごっこ——では、恐ろしい「おに」の意味は全くなくて、「捕らえる者」のことになつてゐるときであります。社会が違い、場合が違つるので、特殊の意味ができ、こうして特殊の意味ができるから、同じ姿の語がふえて來るわけです。「かご」は、元來、竹などを編んでこしらへた、物を入れる品を一般に稱するのでありますが、そういうこしらへ方で、しかも人が乗る駕籠かごができてからは、物も大いに違い、「かご」という語の意味も特殊になつて、文字まで変わらせたのであります。この「かご」の意味は、特殊になつておりまして、それがために同じ姿の語がふえたわけでありませう。もとが一つであるところからは、以前の語の應用であります。別の意味を持つて別なものの名となつたところからは、語がふえたといえるのであります。もっとも、物が違えば名称まで変えたくなくて、ことさらに変えることもありません。このかごにだん／＼竹かご以上のりっぱなものができた時、上等の方を「のりもの」と稱したなどは、まさにその例であります。そしてこの「のりもの」という名称にしても、一般にはいずれも「かご」「よかご」といっていました。鳥といえは廣く「鳥類」をさすわけでありませうが、「とりがなく」「とり料理」の「とり」、その他干支の「とり」も「にわとり」のことと、すぐに了解されます。これは最も人家に親しいものであるか

ら、特殊なものが一般名でさされるようになったのであります。あの「しゝ」がやはりそうで、古い書物に「獸」という字を「しゝ」と読ませていくくらいで、もとは一般に「獸」をさしたのです。「しゝ、狩」でも、必ずしも「しゝのしゝ、狩」に限っていません。ところが、「しゝのしゝ」「しか」のことになり、いっそう縮まって今では「しゝのしゝ」のことになりました。「ぼたんにからしゝ」「しゝ、舞い」などという「しゝ」はこれとは違います。

こういう特殊の意味になる事實は、いずれの國語にも非常にたくさんあります。しかし、ちょうどこの反対に、本来特殊の意味であったのが、一般の意味になる方は、それほど多くありません。例えば、「たま」は飾りにしたりする美しい宝石、ことに「眞珠」の意味であったでしょうが、その「円い」ことが縁になって、およそ円いものはみな「たま」というにいたりしました。「塔」は佛教の方の建築の、一定の様式で、材料もほゞきまっていたものの称であったが、だん／＼廣くなって、高く突っ立っている建築物であれば、中に佛の遺物を納めなくとも塔ということになって來ました。さきに申しました「のりもの」は、そのころかごの一種のことであったのが、今日ではなんでも「乗用の物」ということになっているのも、この類の例になります。こういうのが一般の方へ意味が移る例なのであります。

移るといえば、いさ／＼かでも觀念の内容に親しみまたは似通いがあるとすると、形でも色でも大きさでも、作用・位置・運動等でも、いろ／＼なことを縁にして、語の形はそのまゝにして置いて、意味を変わらせることがあります。これはさきに申した特殊化・一般化という行き方をする間にも起ることでありまして、いわば連想で縁がついて、一方から一方へ移るのであります。「一つ」という語は、

星が一つ見える、一つ目小僧、一つ年上など、まさに一箇、一つという数を表わすのであります。が、「何か一つの歌いましょう」というと「不定な一つ」の意味になります。「どうか一つお願い申します」ではちよつとという意味になります。「一箇」ということが、「軽く」思われるので、その軽さが縁になって、かよくなるのであります。「目」という語の意味がいろ／＼になることを申せば、ねこの目、人間の目は本義通りですが、「目がとゞく」「目をつける」は「見る働き」であり、「ひとゝ目にあう」などは「場合」「機会」「こと」の意で、目で見ることを出会うことにしているのです。縫い目・継ぎ目・合わせ目などは会う所という縁を取ったのです。網やざるについて、目といえは、「あいている」ということであります。疊の目でも、まず／＼あいていることにしてそういいます。碁盤の目などはあいてはいませんが、あいている場合に似ているのであります。——もっともこれらは目の数が二つどころではなくずいぶんたくさんありますけれども、そこは考えないのです。——すりばちの目、やすりの目、のこぎりの目などになりますと、いっそう様子が違ってほんとうの目とはよほど縁が遠くなりませんが、やはり「あいている」という考えがよっている類であります。物差・はかりの目など、刻んだ刻み目も、これにつながった考えです。そうなれば刻んだのでなくても、こまかい筋になっているのも目といえるようになり、木目などが成り立ちます。しばいのかわり目などは、さきに申した「継ぎ目」などと親しく考えられることです。耳は受身のもので、目のようにあいたり、ふさいだり働きませんから、そういろ／＼にもなりません。織物の耳、なべの耳、半紙の耳は、耳が出ている、くっついたような状態にあるところからいうのでしょう。なべの耳が一番適當なようです。数も合いますし、位置のぐあいもまあよろしいから……。足はからだの「下にあること」したがって上を支えること、歩く働

きなどが思いつかれます。そこで、「山の足」は下にあることから思いつき、「机の足」は下でもあり、上を支えるものでもあるのでいいです。「船足」は下であり、また時に、歩く、進むことが考えにはいっています。足をもって直ちに歩くこととする例をいえば、「足が速い」がそうです。蒸し物・たべ物の足の速いのは腐る方へ走るからでしょう。持ちこたえの力が少ない方だけを見ては、たべ物の足が弱いということもあります。形・様子を採ったものでは、足にできる「たこ」、空にあげるたこ（このたこがやはり形でいっています。）の尾がそうです。飛行機の「羽」は形のほかに位置も、作用もはいつています。大きさについては、小さいことに「豆」が使われます。豆人形・豆本・豆びなといっています。もっと小さくいたいと、「けしびな」など「けし」を持って來ます。

かようにしてずいぶん自由に、語の意味が変わって行きます。しかもこの場合に、必ずしも嚴密に似通っているというようなことがなくとも移るので、通常、「茶」といわれている色など、茶の葉の色、茶の木の色、茶をせんじたものの色などと、どこに関係があるのかと思われるようなのが、いくらもあります。ことに物の材料の名を應用すると、よほど自由に行きます。「かね」という語が、鐘にも、昔齒を染めたものにも、貨幣にも使われています。そうして今日の貨幣のように紙を用いていてもまだ「金」といっています。これは材料の名から硬貨の名になり、硬貨は交換通用するものであるという点から、今度はその通用の方が縁になって、紙に及んだのです。こういうふうには、それからそれへとだん／＼とつながって行くことも珍しくありません。これは轉々する方の一種として挙げられる例であります。

さて轉ずる、移る跡を尋ねることはなほだもしいことで、「藥」が病をなます、苦痛をとめる、襲いになるということから、何かの効能があることを「藥になる」といい、したがってその反対の、身の害になる方を「毒」といって、必ずしも服用しないものにまで及ぼしています。「そういう本を見るのが毒なのだ」などというのがそれで、「効能がない」という意味にもわざわざの意にも「毒」といいます。藥は食物のようには用いないで、少し用いる、ということから、少ないことにいって「藥にしたくもない」「藥にするほど」といいます。また藥は調合したものであるというので、よく材料を調合したものを「藥」といいます。火藥なども内服用いずれでもありませんが、まあ語の上では藥の中にはいってあります。昔は「たま藥」といっていました。

次に、こういう意味の轉化がことばの上で起って來るにつれて、ことばの品位といいたしうか、位といいたしうか、そういうものにも變動のあることをいいたしうか。ともかく社会上での扱いは、位が変わって來ることを見ようと思いたしいます。それは例えばあるなかまのことばに今もあることばが、相手を「大將」ということのごときものです。大將といえはいうまでもなく大臣・大將の大將で、大した名称であります。それよりも安價にしてこれを用いるのです。それで最初いい出した時の心持を考えてみますと、幾分持ちあげた、敬意を含めたものでしょうが、語の方から見るとまあ位がさかたつたわけです。昔、下郎なかまに甲州だの、上州だのといったことがあるそうです。これは諸侯國持ちが互に石州殿・甲州殿などといった、いわばだいぶん上の階級の語であったそうですが、それが下郎の間に用いられたのです。もと／＼の産地からそういつたのでしょう。後には、産地をさすような語でなくとも、同様に用いて「銀州」「浪州」などもできました。その起りから考えれば、語としては敬語の意がないではありませんが、使用上においてはだいぶんとつびなやり方でありま

す。きわめて親しい間がらではしまいにほんともありますまいが、くすぐったそな、あるいは反対に侮ったような言い方だとも思われます。しかしこういうことは、どこの言語にもありますし、またこの類の名称以外にもあることで、程度の差こそあれ、そうきばつなこともありません。「かみさま」というのは、もちろん、しかるべき貴人の「北の方」をいったのですが、「かみさん」「おかみさん」とだれにでもいうようになっては、はじめの位は落ちて来ています。上方で「ないぎ」「ないぎさん」「なきさん」というのも同様、「内儀」というからには、相当な地位にある人の夫人の称であったのが、さがつて来たのです。かっぱつな元氣な人を「いせいがいい人」「げんきな人」というのはあたりまえですが、ずいぶんやり過ぎる人を「げんきな人だ」といい、平凡な人、あまり働きのない人を「おとなしい人」「すなおな人」だと、ていさいよくいっている場合もあります。つまり社交上さしさわりのないように、むしろ引きあげて使われるのですから、礼儀上よろしいようですが、そうして使用される語の位は、不適當にあげて使われる度が多ければ多いほど、さがって行きます。「おめでたい」だの、「お人よし」だのがもうさがっているのを見ても明らかです。それ故これもまたさきの「大將」などと同じようにさげられている——もっと場合にもよりますが、さげられているといえます。つまり社交上引きあげた語が語の方ではさがるのであります。なお、意味はもちろんずいぶん高めていいますが、盛んにこれを使うところでは、ついには敬意も何も衰えてしまつて、たゞついていることにしかならないこともあります。今日の手紙の「候」などを考えれば明らかであります。

こういうふうの意味が衰える、もとの色合いがさめることは程度をいう語に多いもので、上方の「大きにありがとう」でも「おゝきにありがと」「おゝきに」などとしばくいうようになると、いっこう大きくもなんとも感ぜられなくなりません。いわゆるごあいさつにとゞまります。「全く」「眞に」「ほんとうに」でも、やはりだんく力が減ります。この力の減つたところを補う要求が起りますと、いろくなことをします。「なんとも申しようのない不都合をいたしまして」を簡単に「ことばに言えない」「なんとも言えぬ」というような、意味の語にして「どうもあいすみません」とか、「どうもみごとだ」などというが、それも衰えると、「とても」ができて、これでまあ言語の養いをつけたのですが、あんまり使つたためにこの語も元氣消耗してもうすたりをうです。「大きに」を「非常に」「すこぶる」「きわめて」「至極」「いたつて」などとやつてもまだ不足になつて、「すてきに」「すばらしい」「もつと行つて」「すごい」までむちうつて来ました。これも疲労しているように見えます。一時は「すこぶる非常に」などと重ねてもいいましたが、やはりきゝめが足りなく思われたのであります。「断然」がそこへのぞいて来ました。廣告でも「特別」だの「破天荒」だの「斬新」「きばつ」「絶対」など、いろいろなことをいい、「超特」などといふ思ひきつたのですが、これもしびれがきれて「狂亂的」「殺人的」だの、なんだのかんだのと捨身でかゝつていますが、こういうものは使う度数が増せば、平凡になつてしまうものです。いずれの國にも「恐ろしく美しい」「恐ろしく高い」などという意味の語がありますが、だれも驚いても恐れてもいません。これでもかこれでもかがつまり落ちめになるようなことになるのが、この類の語の特徴であります。

なお人間社会の中では、あらわにいたくないことがあります。一つは社会の風紀上、ていさい上、慎みたい念慮から起るので、それがために、語らねばならぬ、意味は知らせたいが、語の表面には隠していることになりません。即ちはゞかつていふのであります。便所などを称する語がそれでありま

して、いずれの國でも遠まわしにいろ／＼な語をもつて表わしています。

もう一つは人間の常として「死ぬ」ことはいやでありますから、これをあらわにいわないことに努めてあります。今は「なくなる」は普通ですが、死をはなはだしく忌みかつ恐れた昔には、「果てる」「みまかる」「他界」などいろ／＼にいました。有名な齋宮いづみのみやの忌詞いみことばでは反対に「なる」とこれをいいました。ほかの民俗の間にもこういうことは、はなはだ多いので、要するに忌むことにも遠まわし、または反対の意味の語が用いられるのです。ことにこれは宗教や民俗と深い関係がありますから、それを表わすことばとして大いに注意すべきものであります。

以上意味の変わることに ついて、おもなことをだけ、努めて手ぢかなところで説明いたしました。結びとして申したいのは、意味の変わることと社会の状態の変わることとの関係であります。

元來、語は社会の人々の思想感情を表わすためのものであり、かつその社会の人々が使つて行くものであつて、社会によつて存在しているものでありますから、社会状態や生活様式が変われば、語の姿はたとえ同じでも、その意味は変わります。昔いつた「くつ」「帯」は、その物の使い方においては同じでありましたが、物その物は、あるいは材料に、あるいは様式に変わりがありますから、したがつて精密にはそれに対する観念内容が違ふわけです。またこれを表わす語の内容、即ち意味が変わるわけです。この例などは大差のない方ですが、政体制度の変遷から起るものには大いに違ひます。故にそこを注意する必要があります。

次に、今は諸階級が入り交り、集會が増し、互に競争し、意見をたゝかわせ、希望も趣味も多種多様であつて、学問も発達し、産業の類もふえ、諸外國との交通も盛んでありますから、語の意味の変わることは以前よりすみやかになることは確實であります。

(藤岡勝二の文による)

七 砂丘

これは、映画のシナリオである。シナリオについては、すでに小学校でも、中等國語の「カバチエッポ」でも学習して來た。シナリオの学習にあつては、前後の文章をはつきりと理解し、さらに視覚と聴覚との関係や、映画的表现技巧を学ぶことがたいせつである。

砂丘は文化映画のシナリオである。一つ／＼の場面を明らかに心に写してみることができるのである。本課を讀解することによって、映画的表现のしかたを覚え、郷土に即したシナリオを書いてみるべきであろう。あるいは、動植物の生態とか、生産活動とか、風土・習慣・行事とか、さまざまの素材も拾へるであろう。また、紙しばいにすることも一法である。このようにしてわれ／＼の表現力を發揮して、小さな子供たちのために、その村、その町の文化振興のため、働きかけることは意味の深いことである。

美しい風紋からカメラを上へ向けると、一條の足跡がくつきりと、遠く砂丘の頂に延びていて、ひとりの漁夫の姿が向こうがわの傾斜へ消えて行つた。

雲。(風紋に似ている。)

砂丘面のあざやかな風紋。

風紋におしわれた砂丘脈の波打つ廣漠たる大砂丘。

長い緩やかな凹曲線状の海岸。

アナウンス

わが國の砂丘は低平な直線状、または緩やかな曲線状の海岸線の所に発達する。

線画

秋田・山形・新潟・石川・島根・神奈川・静岡・鹿児島・鳥取等の、わが國において比較的砂丘の発達している地方の海岸線地図。(特に川と砂丘をめぐりように表わすこと。)

鳥取砂丘に接続せる千代川の河口。

アナウンス

現在、砂丘の発達する地域がほとんど例外なく、相当な大河の河口附近であること、また砂丘の砂と、川の砂とが同一の種類のものであることによつて、砂丘の大部分の砂は川が供給したものであることがわかる。

風雨に風化、侵蝕されて崩壊しつつある水源山地の状態。

アナウンス

水源山地が荒廃すると、出水の都度、おびたどしい土砂が下流へ押し流され、海中へ運搬される。

ひどい侵蝕を受けた岸壁に、波浪が打ちつけている。

アナウンス

海岸でも波に洗われて土砂が運び去られる。

奇岩突兀たる海岸の景勝。

アナウンス

美しい海岸の景観も、波浪の侵蝕を受けた陸地の創痕にほかならない。

砂丘に寄せては返す波。

砂の岸堤の表面から乾いた砂が吹き送られる。

アナウンス

波が岸へ砂をうちあげる。太陽と風とが、その表面を乾燥させて、砂粒を陸の方へ吹き送る。

なごさ近くの砂丘植物群生地帯。その種類の一つに左の字幕を画面に二重露出する。

はまごう

けかものはし

はまぐるま

こうぼうむぎ

アナウンス

高潮線附近には、乾燥、塩分、砂の移動等非常な悪条件に堪えて、根強く生育して行く砂丘植物の地帯がある。これらの植物は第一次砂丘建設の役割を果たすもので、海から吹きあげられた砂をせきとめると、ここに胚芽的砂丘ともいうべき舌状の小さな砂丘ができる。

植物の根方にできている舌状砂丘。

海岸線に沿って起伏している小砂丘群から背後の大砂丘群へ移動。

アナウンス

これが幾つも結合すると、海岸線に沿って不規則な砂丘脈ができ、それが次第に発達して大砂丘になる。鳥取の砂丘脈は、東西十六キロメートル、南北二キロメートルに及ぶ廣大な地域を占めている。

鳥取砂丘の鳥瞰移動から千代川流域の地形。

同地域の線画。

現在の状態から海が陸地深く入りこみ、更に現在の状態を呈するにいたる土地の生成変遷過程を表わす。

アナウンス

鳥取地方の海岸線は、大昔、現在の陸地の方へ奥深く湾入していた。ある時代における土地の隆起と、長い年月にわたって千代川が運搬し來たった土砂の堆積とによって陸地ができ、昔灣入の一部であった所が湖となって取り残された。

砂丘に切り離されている湖山池と海。

同じく多鯰が池と海。

アナウンス

湖山池・多鯰が池がそれである。

砂丘の中にぼつんと取り残されている一つ山。

岩には歴然と波の侵蝕の跡がある。

アナウンス

この土地隆起の一証として、一つ山のすそに、波の侵蝕を受けた岩を容易に見ることができぬ。

風紋



斜面の砂が風に吹かれて流れている。その上に風速計を置くと、針は毎秒三メートル以上の速度を示す。流れる砂。

アナウンス

乾燥した砂丘の砂は、秒速三メートルから四メートルの風力で動きはじめ、砂丘の表面に美しい風紋を作る。

砂丘の表面にできる淡い凹凸のしま模様。

斜陽にくっきりと浮彫されている美しい風紋の種々。

アナウンス

風紋は風の作る一つの藝術であり、砂丘の化粧であるともいえる。

風速計の針は激しくまわり、砂が飛ぶように流れる。風紋の一部はかき消され、こうぼうむぎの長い葉がのびている。

アナウンス

しかし、風速が七、八メートル以上にもなると、かえって風紋は破壊される。

風あたりの強い斜面はたちまち砂煙におゝわれる。

風上面、風下面とも傾斜の整った砂丘。

アナウンス

砂丘の形は、傾斜風上に緩く、風下に急である。

線画

風上風下面における砂の移動状態。

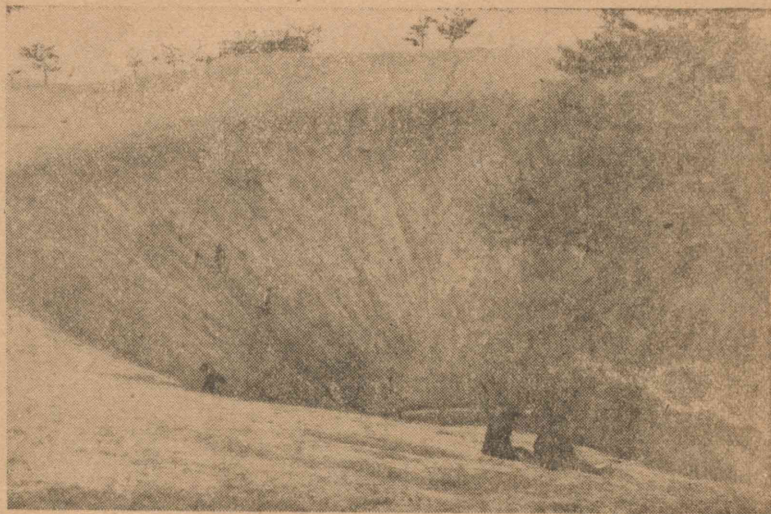
アナウンス

風上斜面では風の力に支配されて移動していた砂が、風下斜面では風から解放されて自分の重力で転下する。かくて砂丘は風のために次第に風下へ移動する。

線画

砂丘の移動状態。土地をうずめ、家をのみ、次第に内陸へ迫る。

アナウンス



砂丘の進む速度は、氣候や地形等によって異なるが、主風の方向へ埋没作用をなしつゝ年々二メートルから二十七メートルも移動する。しかし、その前方に風を通さない自分より大きな障害物、例えば小山とか密林とかがあると、それに突き当たった風がうずを生じるから、砂丘はそれら障害物に接触することなく、間にもみぞを作ったまゝでおいおい高さを増す。障害物が森林などであると、森林もまた生長するので、このくぼみはいよゝ／＼深く大きくなる。その発達したものを鳥取辺ではすりばちと呼んでゐる。

鳥取砂丘における長者が庭すりばち・追後すりばちなどの形態。

すりばちの底から清水がわいている。

浜坂すりばちの美しく整った形。

アナウンス

浜坂すりばちの場合は、その底からわく清水の侵蝕によって、まれに見る整った深さ二十メートルにも及ぶすりばちの形態を示している。

村を貫流する小川の豊富な水量。

アナウンス

泉はかつていかなる旱魃かんぱつにもかれたことなく、村を流れて飲料水となり、更に数町歩の田地をうるおしている。

尻無川の奇態な流れ。

アナウンス

砂より出でて砂へ。——その名のごとく尻を没している尻無川。

夢の世界を思わせるバルハン(三日月形砂丘)。

アナウンス

また基盤と風向との関係によって美しいバルハンのできることがある。

いじらしくもかおり高く咲いている砂丘植物の花数種。

砂丘の砂がなだれこんでいる多鯨が池。

アナウンス

かつては海であった所が、砂丘のために外海から切り離されて湖となり、その後も次第に面積を狭められつゝある。鳥取の多鯨が池は百年間に約三分の一にすぎなかった。

多鯨が池と海との間の長者が庭といわれている広い砂丘地帯。

アナウンス

大昔この附近に、傳説によると多鯨千軒といわれた聚落しゅうらくがあったが、今は跡かたもなく消滅し、ただ北方のすりばちに、長者が庭という名をとめているにすぎない。

風のために根をあばかれた植物。

砂を吹き拂われて地はだを露呈している台地。

数名の学生が古代の遺物をあさっている。

その採集した石器・土器類。

アナウンス



風は砂丘を発達させ埋没作業をすると同時に、以前の砂丘を破壊して暴露作業をすることがある。その結果、こうした古代の遺物がしばしば発見せられ、幾多の傳説を証拠たてるとともに学界にも少なからぬ貢献をしている。

長者が庭は荒涼として学生の影は長い。

悠久ゆうきゅうの昔ながらに寄せては返す波。

砂丘のかなたへ沈み行く太陽。

砂丘に侵入された田畑。

砂に埋没されつゝある作物。

砂丘の傾斜に迫られた村。

アナウンス

爾來じらい幾星霜、砂丘が田畑をうずめ、人家をのんだ例は枚挙にいとまがない。家を失った人間は後退をよぎなくされ、土地を失った者は離散するよりほかはなかった。

柳茶屋の背後に迫っている砂丘。

アナウンス

五十年前には、この家と背後の砂丘との間にはかなりの耕地と竹やぶとがあった。

家の横に見られるさしやかな竹やぶ。

アナウンス

その竹やぶが砂丘に押されて街道をふさいだ。

家に通じているまつ林の中のさびれた道。

アナウンス

行くに道なき今では柳茶屋という名ばかりが、かつて大名行列をすら通した山陰本街道のなごりをとどめている。

砂丘に襲われて深く幹をうずめられたまつの木。

立ち枯れとなっているものも少なくない。

アナウンス

昔の砂防造林は、実に言語に絶する難事業であった。

砂丘の表面に空しく、露出している土塊の群列。

アナウンス

忽然として砂の中から現われたこれらの土塊は砂防造林を企図して成らなかつた過去の記録で

ある。山土といっしょに移植したその一つ一つの松苗には、農民たちの大きな希望がつかねがれ
ていたことであろう。

堂々たるまつの大木の林立。

日本農功傳。

海岸砂丘固定作業史。

成功せる造林。

それを行った義人の徳をたしめる顕揚碑には古い年号が刻まれている。

アナウンス

だが歴史は、人類のために敢然として砂丘の暴威と戦った幾多義人の偉業を傳えている。現在
各所に見られる砂防林が、耕地が、その血と汗の記録にほかならないのである。

砂丘に対し内陸の防壁をなしている年を経たまつ林。

あるいは村を守り、

あるいは耕地を守っている。

耕地化した砂には、りっぱに麦がみのり、かぼちゃが生育し、一面にくわの葉の緑がきらもっている。

開墾記念碑はいたる所に立ち立てられ、列車が不安なく驀進している。

生きてその徳を敬われる上山翁の顯揚碑。
信念に生きて労苦を克服した上山翁の顔。

アナウンス

本年八十四歳の上山翁は、その開墾地実に四十数町歩にも達している。

村の入口に建てられた堂々たる佐々木翁顯揚碑。梨花満開の果樹園に働く佐々木翁。

アナウンス

八町歩の造林、十五町歩の耕地開拓を完成した佐々木翁は、七十六歳の老軀なお砂防組合長として村民の信望を一身に集め、ゆう／＼多餘池畔に果樹園を営んでいる。

花の中に農夫として功成り名とげた翁の姿はふさわしい。

押し寄せる荒波。

怪しい雲の動き。

強風におの／＼砂丘植物。

砂塵うず巻く砂丘。

アナウンス

しかもなお、砂丘は更に廣大なる面積にわたって存在し、その進行を続けている。

ます／＼荒れ狂う砂丘。

斜面を吹きあげる風と砂。

丘上を飛ぶ砂。

丘面を疾走する砂。

飛砂に模糊たる聚落。

農家を襲う砂煙。

いろりの火を囲む農夫の一家。

砂垣に吹きつける飛砂。

老人の顔のしわには長年月にわたって砂丘と戦った労苦が刻まれている。

村道の砂煙の中を小学生たちが急ぐ。

風砂におの／＼果樹。

同じく麦畑。

いろりに向かっている肩はゞの廣い農夫のうしろ姿。

アナウンス

このような自然の暴威を、人々は決して黙視しているわけではない。

砂の中に力強く打ちこまれるくさ。

女はくいを支え、男はかけやを打ちおろす。砂丘にいどむ多くの男女。海岸線に沿って延々たる砂防垣が作られている。その後方にはまつの苗を植える無数の砂囲いがあった。

娘たちによって松苗が一本一本植えられて行く。

アナウンス

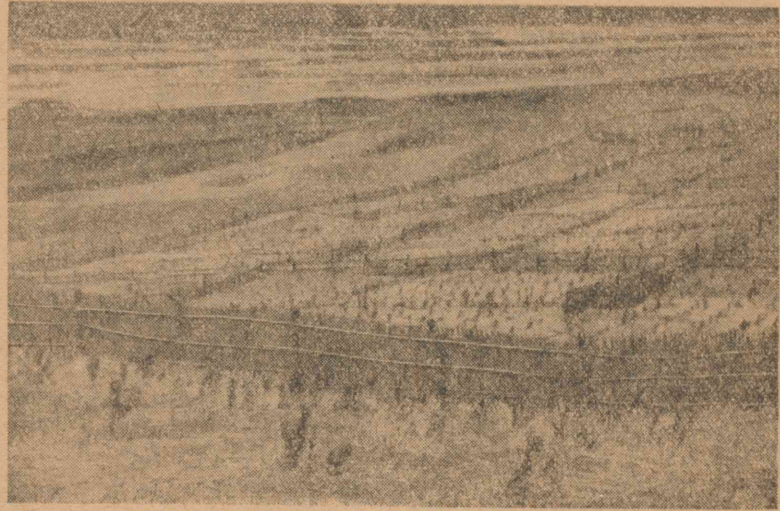
やがてこの一帯は大砂防林となり、後方の砂丘地帯はりっぱな耕地に変じて、貴重な物資を生産するにいたるであらう。

完成した工事の全貌。

鳥取高農原教授研究室。びんづめにしてあるおびたしい砂の種類。各地の海岸から蒐集されたものばかりである。

アナウンス

産地によって砂の色彩は著しく異なり、鉱物成分



もさまざまであるが、砂丘の砂は石英がその大部分を占め、長石類・角閃石・磁鉄鉱などを含んでいる。

顕微鏡に見入る学生。

顕微鏡を通して見た砂丘の砂。

アナウンス

その表面は磨滅によって著しく丸みを帯び、川砂などに比べて光沢がない。

教授と学生のコベッキ分析試験。

アナウンス

コベッキ分析器によると、砂は粗砂・中砂・細砂・微砂・粘土の五種に分類され、土壌構成と植物生育との関係、更に含有塩分の率などの研究が進められ、試験栽培の結果、多種類にわたる植物の生育が可能になった。

高農試験地における、わた・なす・トマト・すいか・メロン・けし・除虫菊等の優秀な生育状態。

夏期の太陽のもとにやけついている砂丘の砂に、温度計を載せると、水銀はたちまち五、六十度上昇する。

アナウンス

また、夏期における砂丘表面の砂の温度は、攝氏四十五度から六十度にも達する。これによつてこゝに早出し栽培が可能となり、作物はより新しい分野へ飛躍しようとしている。

砂防造林はすでに海近くまで進出し、廣範圍の耕地開墾に成功した鳥取砂丘の東端地帯。

スーパードラインボーズタイトル (画面に二重露出する字幕)

かつて、人間を駆逐した砂丘は、今やその子孫たちによつて征服されつゝある。

農耕にいそしむ人々。その後方の大砂丘は基盤の目のごとく砂防垣が結いめぐらされている。

(下村健二の作による)

國語學習の手引

中等國語二(2)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝに記さない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題 目	原作者	訳者	原 典
一	クラーク先生	大島 正健	クラーク先生とその弟子達	「世界」第十四号
二	國際婦人會議に出席して	石垣 綾子		
四	少年の日の思い出	ヘルマン・ヘッ セ		
五	万葉秀歌	高橋 健二	放浪と懷郷	
六	意味の変遷	斎藤 茂吉	万葉秀歌	ことばの講座第一輯
七	砂丘	藤岡 勝二		「文化映画」第二卷第三号
		下村 健二		

國語學習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を學習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい學習を進展させて行つてほしい。

一 クラーク先生

- (1) クラーク先生のけ高い人格と熱烈な信仰の力が現われているところを書きとめる。
- (2) クラーク先生の教育のしかたの特徴を簡條書きにする。
- (3) クラーク先生の感化を受けた学生たちの勉強ぶりが、どこにどう現われているかについて調べてみる。
- (4) クラーク先生の「Be gentleman!」と「Boys, be ambitious!」の意味について話し合う。

(5) 自分の恩師や、自分の知っているり、ばな教育者について話し合。たり、その逸話を書いたりする。

二 国際婦人会議に出席して

(1) 次のことを読みとる。

イ、国際婦人会議の目的は何か。

ロ、世界女性の温かい友情がどこに現われているか。

ハ、「国際会議」らしい様子が現われているところはどこか。

ニ、各國の代表者のそれらの特徴がどう現われているか。

(2) 国際婦人会議に出席した、この作者の感想を短いことばにまとめる。

(3) この文を読んで、自分たちの会議のしかたについて反省し、話し合う。

(4) いろいろの会議(自治会・批評会など)に出席したり、見学したりした時の経験を記録する。

(5) 女性の手になつた作品を読んで感想を述べ合う。

三 学級日記

(1) はしがきの文をよく読み、この課を学習する目あてを考える。

(2) 次の問に答える。

1、開校記念日におけるこの学級の出し物は何か。

ロ、少年少女らしい愛校の情熱がどこに現われているか。

ハ、学級の人たちの心を一つにして生活している様子がどう現われているか。

(3) 右のほか、次のような学習をするのもおもしろい。

イ、月日の上に、適当に数字を入れてみる。

ロ、読書発表会を開く。

ハ、轉校した友人へ手紙を書く。

ニ、「幸福」について話し合う。

ホ、学級雑誌や図書室について相談する。

(4) 自分たちの学級日記の書き方について話し合う。個人の日記と違う点を考える。

四 少年の日の思い出

(1) この少年の「熱情的な蒐集家」の様子が、どこに、どんなことばで現われているかを調べ

る。

イ、この文の書き出しの情景について。

ロ、エミールの性格について。

ハ、少年の、エミールに対する心持。

ニ、少年の母の愛情と、心づかい。

- (3) 自分の集めたちょうちょうをおしつぶしてしまつた少年の心持についてよく考える。
- (4) この作品のすぐれているところを、次の点から考えてみる。
 - イ、主人公の心持の表わし方。
 - ロ、表現のしかた。
 - ハ、小説の組み立て方。
- (5) 小説について話し合う。
- (6) できたら、この小説をシナリオふうにかきかえてみる。

五 万葉秀歌

- (1) 歌と、その評釈とを、比べ合わせて何べんも読む。
- (2) こゝに出ている歌の中で、自分の好きなもの一首を選び、感想を述べる。
- (3) 一つ／＼の歌のすぐれている点を読みとる。
- (4) これらの歌人について調べる。
- (5) 万葉集の特徴を、簡潔書きにしてみる。
- (6) 万葉集の代表的な歌について研究する。

六 意味の変遷

- (1) 次のことについて説明ができるようにする。(表にまとめてみるのもよい。)
 - イ、語の一般の意味が特殊の意味になる理由とその実例。
 - ロ、特殊であつたものが一般の意味になる理由とその実例。
 - ハ、連想による意味の変遷する理由とその実例。
 - ニ、敬語の意味が衰える理由とその実例。
 - ホ、遠まわしに言つたり、反対の語を使つたりする理由と、その実例。
- (2) ふだん使っていることばについて、次のことを調べる。
 - イ、一つの語で多くの意味に使われるもの。
 - ロ、連想作用で意味がすゝかり変わつたもの。
 - ハ、もとの色合いがさめてしまつたもの。
- ニ、社会状態や生活様式が変化したために変わつたものや、新しくできたもの。
- (3) 学校内や一般社会で使われている流行語について話し合う。

七 砂丘

- (1) この課を学習する順序と方法の一例。
 - イ、各場面に番号をつける。
 - ロ、一つ／＼の場面に題をつける。
 - ハ、両面の説明のことは読みとる。

- ニ、場面を幾つかにまとめる。それに見出しをつける。
- ホ、おもな場面をスケッチ風にえがいてみる。
- ヘ、アナウンスの部分は大きい声で説明の文は小声で読む。
- ト、学友と共同で手分けをして、絵や線画をかいたり、アナウンスをし合。たりする。
- チ、場面の連続と構成について研究し合う。
- (2) 砂丘のできるわけを短い文に書く。
- (3) 砂丘にいとむ人間のはたらきを読みとる。
- (4) 映画的表现について例をあげて説明する。
- (5) 学校生活や郷土の自然現象をシナリオに書き、これにアナウンスをつけてみる。
- (6) 文化映画のシナリオと劇映画のシナリオとの違いについて考える。

中等國語
二
(2)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Apr. 4, 1949)

發行所

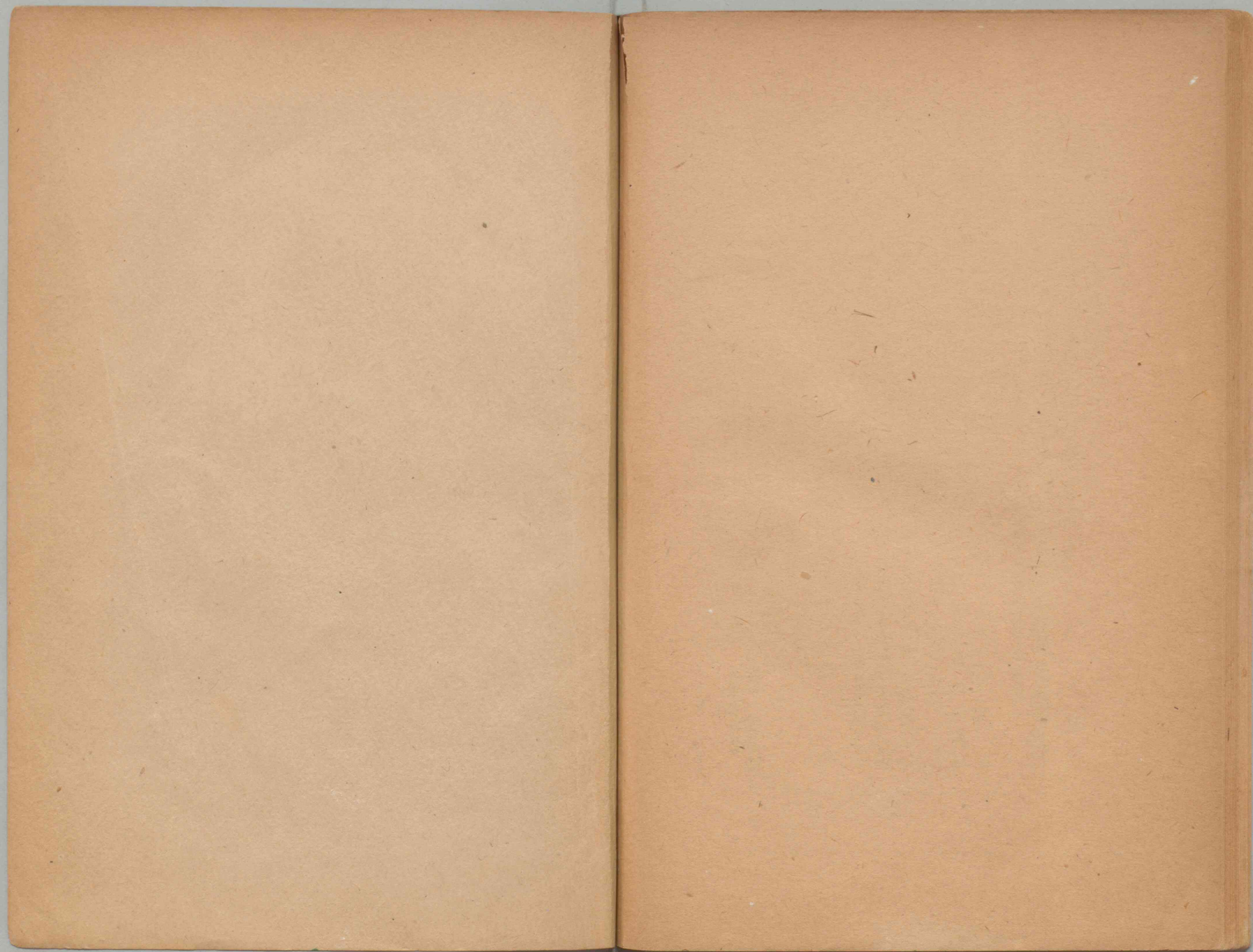
東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

昭和二十二年九月四日印 同日印刷
昭和二十二年九月八日發行 同日印刷
昭和二十三年五月二十九日修正印刷 同日修正印刷
昭和二十三年六月二日修正發行 同日修正印刷
[昭和二十四年四月四日 文部省検査済]

著作権所有 文部省
著作兼發行者

發行所 東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 阿部眞之助

印刷者 東京都千代田区神田保町一ノ四六
文化印刷株式會社
代表者 加藤新





広島大学図書

0130449679

